



京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

Kyoto University  
Division of Graduate Studies  
京都大学大学院教育支援機構

Germany  
South Korea  
United States  
Finland  
Sweden  
India  
Norway  
France  
Taiwan  
Poland  
Canada  
Madagascar

Tanzania  
China  
Republic of Uganda  
Malaysia  
Thailand  
Laos  
Niger  
Kenya  
Zambia  
United Arab Emirates  
Pakistan

大学院教育支援機構 (DoGS)  
**海外渡航助成金**

— 2024. vol1 —

**助成金額** ▶ 一人当たり 最大**40**万円

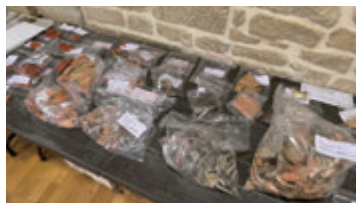
京都大学大学院教育支援機構では、大学院教育のグローバル化を目的として、本学の大学院生がフィールド調査や国際学会での研究発表、海外での共同研究、海外の研究室で研究指導を受ける等の目的で海外へ渡航するにあたり、一人あたり最大40万円を奨学金として支援します。



01 文学研究科  
歴史文化学専攻 修士課程2年

坂野 水咲

計画名 International Medieval Congress 2023 と  
Los Bañales発掘プログラムへの参加  
渡航国 イギリス、スペイン



## ローマ史研究の最前線 —— 国際学会と発掘調査参加を通じた欧州の学生との交流 ——

本助成金を利用し、私は約2週間イギリスとスペインに渡航しました。前者はリーズ大学で開催されたInternational Medieval Congress (以下IMC)に、後者はナバラ大学が主催するLos Bañales Archaeology Programme (以下LB)に参加するためです。私は4-5世紀に初期キリスト教がローマ帝国に定着する過程で食事がどのような役割を果たしていたのかを研究しています。IMCにはこの関心に合致するセッションがあったため参加したのですが、欧州の博士課程院生がその分野で現在どのような研究を行っているのか知り、自分自身の研究方針もブラッシュアップできたため非常に学びの多い経験となりました。LBはローマ時代の遺跡発掘プログラムです。私は1週間毎日発掘作業を行ったり、出土品の分類や修復作業を行ったりして、考古学調査を実地で学びました。私が行っている食の歴史研究は、獣骨データのような考古学調査の成果を活用することも多く、今後研究を続けるためには考古学の研究成果を適切に理解する必要があります。この体験は私にとって大変有意義でした。またこのプログラムを通じて育んだ縁は現在も続いており、2024年の調査にも参加を予定しています。

## 国際的な知識の拡充と研究環境への挑戦。 世界に羽ばたく8名の大学院生の体験談を紹介します。

### 「移行概念」の再構築 —— ヨーロッパの研究者との対話 ——

私の渡航目的は、日本とヨーロッパ諸国において、学生が高校から大学へどのように移行しているのかを比較検討することによって、移行概念を捉え直すことにありました。そのために、私は、ベルギー、オランダの主たる移行研究者を訪問し、ヨーロッパ諸国における学生の移行実態と移行研究の到達点と課題について議論しました。その後、イギリスで開催されたヨーロッパ教育学会 (ECER 2023)にて、日本人学生が経験した移行の多様性を発表し、参加者と意見交換を行いました。これらの対話を通して、国ごとに移行のどんな観点を問題とするのかが異なっており、その差異には各国の学校体系の特徴が反映されていることを学びました。また、今回私が自ら訪問した研究者以外にも、ECER 2023では、さまざまな分野の研究者と知り合うことができました。今回構築することができた研究者ネットワークを大切に、今後は「日本とヨーロッパ諸国における移行経験」に関する発展的な共同研究に着手していきたいと考えています。



02 教育学研究科  
教育学環専攻 博士後期課程3年

田中 孝平

計画名 高大接続における学生の移行に関する比較検討  
渡航国 ドイツ、ベルギー、オランダ、イギリス





## 03 理学研究科 生物科学専攻 博士後期課程2年 善本 智佳

計画名 キルギスのヤクゲノム研究のための会議・  
実験および学会参加  
渡航国 キルギス共和国



### 現地とともにゲノム研究を

過酷な環境に住むヤクという動物の集団の歴史に興味を持ち、キルギス共和国に住む個体を対象に遺伝解析に取り組んでいます。ヤクは中央ユーラシアの遊牧民の重要な家畜であるウシ科動物です。キルギス共和国での研究を始めるにあたり、キルギス共和国アカデミー生物学研究所とキルギスートルコ・マナス大学の方々に多大な協力をいただいております。

今回DoGSのご支援を受けた渡航では、現地の共同研究者に招待していただいた学会に参加しました。そこでは他地域、他分野の様々な研究者と知り合う機会を得ました。そうして知り合った方々から、今後の研究についてのお話や、地元ならではの知見を伺い、夢が広がりました。また、以前の渡航で採取していた生体試料から、DNAを抽出し、これを京都に持って帰ってきました。日本の検疫上の問題で、DNA抽出は現地で行う必要があったのです。現地での協力機関のお世話になるとともに、実験技術を現地の学生や技術者と共有することができ、関係を深める良い機会になりました。

大学院教育支援機構 (DoGS) 海外渡航助成金は、世界を舞台に研究を深め新たな知見を探求する機会を提供し、あなたの未来を切り開く鍵となります。あなたも海外渡航助成金を活用し、世界との繋がりを築き、自らの研究の可能性を広げ、未来への第一歩を踏み出しましょう！

### 研究の自動化を探る ―― 自由自在なゲノム編集技術の確立を目指して ――

私は修士課程の頃からNational Research Council Canada、コンコルディア大学応用合成生物学研究センター、iPS細胞研究所の3機関で行う共同研究に参加しています。この研究では、私の所属するWoltjen研究室が構築した実験システムを応用し、ゲノム編集試薬の大規模なスクリーニング実験を実施しています。これまでオンラインで実験環境の構築や提供、技術支援、そして月に1度の共同ミーティングを行ってききましたが、今回の渡航で、トロントとモントリオールを訪問し、学会発表に併せて共同研究チームと対面で議論をしてきました。トロントでは、疾患モデリング研究における細胞品質管理に関してTill & McCulloch Meetings 2023で発表しました。モントリオールでは、実際のワークフローと一緒に実施しながら、共同研究の出版に向けた準備を進めました。今回の渡航では、多くの外国の研究者と交流する機会がありました。今後のキャリアパスを考える上で、人生における重要なマイルストーンになると考えています。



## 04 医学研究科 医科学専攻 博士後期課程2年 丹羽 諒

計画名 再生医療の国際学会参加と共同研究の実施  
渡航国 カナダ





05 工学研究科  
合成・生物化学専攻 修士課程1年  
**宮田 彩名**

計画名 EuroMOF 2023での研究発表及び  
マドリード自治大学・バレンシア大学での共同研究  
渡航国 スペイン



**多様性が紡ぐ新たな発見 —— 国を超えた研究交流の魅力と可能性 ——**

私の渡航目的は、共同研究先での実験実施、ならびに分野最大の国際学会への参加を通して幅広い研究トピックに触れることでした。直接研究に繋がる部分だけでなく、現地の研究環境も確認したいという気持ちから、1ヶ月間の滞在を計画し、共同研究先2拠点に滞在させていただきました。渡航の成果として、参加した国際学会では最新の研究トピックを深く学ぶとともに、各国から集まった研究者と密に交流することができ、非常に充実した時間を過ごすことができました。またポスター賞という形で自らの研究が高く評価されたことも、今後研究者として歩みを進めるにあたり、大きな励ましとなりました。見ず知らずの地での研究生活に際して、言語の壁や共通認識の違いなどによる難しさもありましたが、多様性を楽しむタフな姿勢、そして多様性の中から生まれる新たなサイエンスの素晴らしさに気づくことができ、大変貴重な経験となりました。今後はこの経験から得た追い風を背に、一人前の研究者へと成長できるよう、実践的な研究スキルを磨きたいと考えています。

Germany  
South Korea  
United States  
Finland

Sweden  
India  
Norway  
France

Taiwan  
Poland  
Canada  
Madagascar



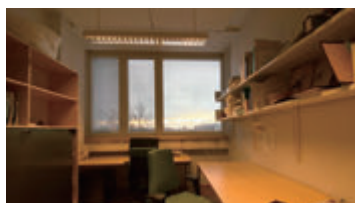
**ヘルシンキで幹内部の物質移動のシミュレーションを学ぶ**

私は樹木の幹からのメタン放出現象について研究しています。これまでの研究で、微生物によってつくられたメタンが幹内部で3次元的に移動することで、メタン放出量が1個体内でも大きくばらつく可能性が示されました。そこで今回、ヘルシンキ大学で幹内部の物質の移動の研究を専門とするHölttä教授の指導のもと、数理モデルを使って幹内部におけるメタンの移動をシミュレーションすることにしました。あらかじめ出発までに測定データと単純なモデルを準備したうえで、現地ではHölttä教授と議論しながらモデルを改善させ、さらにはモデルへの入力をどのように変化させればメカニズムをより明快に理解できるか指導していただきました。滞在の最終日にはゼミ発表として成果を報告し、現地の他の研究者とも意見を交わしました。今回習得した技術を活かし、今後は測定と数理モデルの両輪で、幹メタン放出のさらなる理解を目指していきたいです。そして今回の滞在で得た人脈も頼りにしながら、より長期の在外研究を行いたいと考えています。



06 農学研究科  
森林科学専攻 修士課程2年  
**持留 匠**

計画名 樹木幹メタン放出のメカニズムを数理モデルで理解する  
渡航国 フィンランド





07 人間・環境学研究科  
共生文明学専攻 修士課程2年

吉田 彬人

計画名 産業の観点からみた中世初期イタリア修道院領の地域的特徴の解明  
渡航国 イタリア



## 比較から得られる知見 —— 歴史地理学の視点から ——

私は歴史地理学を専攻し、中近世日本を対象に産業の観点からみた地域的特徴の解明をテーマに研究を行っている。本渡航ではこうした関心と知見を踏まえ、産業の観点から中世イタリアの一修道院領における地域的特徴を明らかにすること、その成果と私がこれまでに明らかにした中近世日本に関する成果とを比較・検討し両者の特質を明らかにすることの2点を目的とし調査を実施した。現地では、踏査による景観の観察、聞き取り、博物館の見学などを行った。調査を通じて、既往研究の成果に対して歴史地理学の視点から考察を深めるなどの一定の成果を得るとともに、今後の研究課題を明確化することができた。また、イタリアの事例との比較・検討は、中近世日本の事例を相対化し、より広い視野のもとで捉え直す機会となり、自らの主要な研究対象・テーマに対しても多くのフィードバックを得た。具体的な知見や海外調査のノウハウを得たことに加え、海外研究の可能性や意義を実感することができた本渡航は、私の視野と今後の研究の可能性を大きく広げるものとなった。



Tanzania  
China  
Republic of Uganda  
Malaysia

Thailand  
Laos  
Niger  
Kenya

Zambia  
United Arab Emirates  
Pakistan

## 身体障害×女性の視点から捉えるラオス社会

今回の渡航は、ラオスにおいて女性身体障害者の生活実態を把握し、彼らが生活する上で直面する課題点を明らかにするため、首都・ヴィエンチャン特別市にある共同作業所にて修士論文の現地調査として渡航しました。

男女16名の身体障害者が所属している共同作業所へ毎日のように通い、女性身体障害者のライフヒストリーから日々の生活サイクル、結婚や子育てなどのライフステージの聞き取りを行い、また作業所内で参与観察を行いました。論文のデータ収集だけでなく、現地での人脈構築する目標も達成できました。今回の調査では「家の仕事や経済は女性が担う」というラオスのジェンダー規範から大きく逸脱することなく生活できている女性身体障害者が多かったため「女性である」ことよりも、「身体障害がある」ことによる社会との壁を感じている語りが多く見受けられたため、今後の課題として、渡航で培った人脈を生かしながらさらに調査範囲を広げ、女性の複合差別に着目したラオス地域研究を続けていきたいです。



08 アジア・アフリカ地域研究研究科  
東南アジア地域研究専攻 博士課程(5年一貫制)2年

好光 百合

計画名 ラオスにおける障害者ケアの研究-身体障害を持つ女性に着目してラオス社会を捉える  
渡航国 ラオス





<https://www.kugd.k.kyoto-u.ac.jp/office/#p03>

申請期間や応募資格等の詳細は、大学院教育支援機構のホームページをご覧ください。

